

日記帳

誕生日の前日に図書館に行くと僕の一年後の日記帳がある。

これに気が付いたのは中学生の時だった気がする。夏休みに僕は生物の宿題について調べるために図書館に寄っていた。

図書館にまったく慣れてない僕は、昆虫図鑑の棚を見ていたはずなのに、暗いじめじめしたよく分からない本が並べられている所に来てしまった。

中学生の僕は、自分より大きい本棚に囲まれて緊張していたし、早く明るい児童文庫のコーナーに帰りたいと思っていた。きよろきよろ見渡していると、一冊だけ妙に薄くて軽そうな書物を見つけた。

それは僕の名前が書いてある日記帳だった。

一ページ目には、僕が一つ上の学年で誰と一緒にのクラスになるのか、担任の先生が誰だとか細かく書いてあった。どうやら、来春からの僕の日記帳らしかった。

何となく自分の物じやない気がして、持っていたらダメな気がして、多少心残りがあったけれど、僕は本棚に日記帳を戻した。その日は昆虫図鑑も借りずに大急ぎで走って家に帰った。

そして、春。僕は図書館で見た日記帳に書いてあった通りのクラスになる。それから、僕は毎年誕生日の前日欠かさず日記帳を取りに行っている。

僕は、僕の未来の日記帳を参考に生きている。卑怯な奴だ。

僕は、高校生になって美術部に入った。音楽室で練習する吹奏楽部の君の練習姿が一番よく見えるから、という不純な理由で。僕は高校生らしく恋をしていた。

未来の僕はいったいどういう行動に出るのだろう、告白するのかわからないのか。とそればかり気にして日記を取りに行った。それ以外の成績だとか友人関係は全く興味がなかった。すごく待ち遠しい。

日記はいつもと様子が違っていた。いつもは紺色の地味な日記帳なのに、今年はピンクで花柄の可愛いノートになっていた。表紙の字も僕の字ではなく、丸く可愛らしい字になっていた。日付けが春からではなく冬になっていた、しかも僕の字じやない。

正直すごく戸惑っていた。もしかしたら来年の僕はもう日記を書いていないのかもしれない、と思った。じゃあこの日記は誰のだろう、と違ってページをめくる。

それは、間違いなく僕の日記だった。

僕の、病気を支える君の、日記だった。最初のページにそう書かれている。どうやら、僕は病気になるらしい。

そのノートには、君が僕の告白を受け入れたこと、僕が治りにくい病気になること、僕が気になってしまい君が部活をやめコンクールを諦めること、真っ白な病室で僕と話すのはとても楽しいということ。

想像もしていなかった未来が丸く綺麗な可愛らしい字で淡々と書かれていた。

そして一月頃、僕が、僕は死ぬ。

未来の僕が一年前の僕に日記を送っていたことを聞いて図書館に日記を置きに来た。一年前から検査や治療を始めれば間に合うかもしれないから、生きるために、幸せになるために頑張ってほしい。と、君から僕に震える字で力強く書かれていた。

僕は死んでしまうのだな、とただそれだけ思った。閉館間際の暗く寂しい空気に耐えられずいつもは必ず持つて帰るノートをその場において僕は図書館を出た。恋の行方に心躍らせていた僕を殴りたい。僕はこんな重々しい未来が待っているなんて想像もしなかった。明るい未来が待っているのは当たり前で、そこで高校生らしい恋愛関係が築けるのか、それを僕は知りたかった。

僕は、僕の未来の日記を参考に生きるのはやめた。

僕は死ぬまで君の絵を描こう、と思った。

君は僕なんかに出会わず、部活を続けコンクールに出て、明るい未来を持った良い人に出会ってほしい。僕が告白しなければ、君は僕と知り合うこともない。

僕は音楽室から微かに聞こえる音を聴きながら、君を描いた。僕は検査なんて受けないし、治療もしない。気付いたときはもう

手遅れのほうが、諦めがつく。僕は君に告白なんてしない。君が僕のことですごしまないほうが、僕は嬉しい。僕は君に幸せになってほしい。

真っ白な病室で、僕が描いた君の絵を見ながら眠りにつく僕をこの世界の君は全く愛してくれない。